

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	熊谷直實 : 雜録
Author(s)	小原, 之正
Citation	龍南會雜誌, 20 : 25 - 32
Issue date	1893-11-09
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4136
Right	

物だにあし余等が忠實ある通辨人金は此有様を視て村釀の濁醪を試みんことを勸む其れ善からんとて金に命すれば忽ち凡一升程の濁酒を瓠器に盛り來る大椀を以て小森氏と互に傾け空腹味を覺へず相顧みて微笑す忽ちにして概ね之を盡くす而して酔を感せず既にして食物は漸くに調へり韓童は食藁を余等の前に運べり一種の惡臭即ち葷、腥の氣は鼻を撲ちて食欲は忽ち散じ匙を把るに堪へず強て半椀朝鮮の椀は凡三合を容るを喫す而して亭主に心付けとして携ふる所の寶丹一罐を與ふれば一旦固辭したれども遂に受けて其慇懃を謝す余等は蔚山僉使に宛たる照狀を持するを以て一村より特に優待を受け鄭の宅は陋隘ありとて西城椽門ある公宅に誘ふ此家は間口三間奥行五間位の瓦屋にまて床は板張あり想ふに村中の俱樂部様のものならん至れば官人村翁等座にあり余等を圍みて頻りに種々の問を發す蓋し村中の有志家ならん余等は大に疲勞を感ずるを以て有志等に其旨を告げ無禮を謝して寢に就かんとす金は注意を余等に與へる積りにて窓を指して曰く「貴客大小便は此所より」と余等覺へず失笑す眠るに蚊張は勿論寢具の一もあるがし是に於て板敷を褥とし革囊を枕に代へ洋裝の儘寢に就く、蚊を遣らんが爲めは枯草を焚く煙烟屋に充ち眠るに堪へず且つ夜半床虫、虱、蚤等交々襲ひ來りて遂に余をして危坐せまむるに至れり四邊を顧みれば曩の官人有志家ある韓人等は石或は木を枕とし余等を繞りて平臥し鼾聲高く快眠せり實に平氣にも又憐ある官人憐なる有志家共ある哉此夜天晴れ氣清く陰曆十九夜の月は高く掛りて蔚山城頭にあり今昔の感頻りに集り終に夜を徹す（未完）

熊谷直實

小原之正

頃、は、七、百、五、十、三、年、の、ろ、の、昔、春、風、よ、く、と、吹、渡、さ、り、て、鶯、の、聲、滑、か、に、翩、々、た、る、胡、蝶、は、萬、花、の、笑、に、寛

裳羽衣の袂をかざす、永治元年花の二月の十五日、花落錦小路に於て、熊谷直實てふ一偉人は弓矢、尤の名を負て、脈々たる産聲を發しぬ。時は正に、白河法皇既に崩じ、鳥羽上皇政を院中にきき、美福門院の寵に溺れ、崇徳天皇を強ひて位を近衛天皇に禪らしめ、終に兄弟の中惡しく、前古未曾有の大變、父子兄弟相抗戰え、倫理節義地を拂ひしは、どの保元の乱は、その隱微の兆火を微かに點し、政令行れず、惡徒横行む、良民害せられ、天下紛々、上下恟々、心ある人は昔を忍びて涙を流し、心なき人も安き思は更にあがりき。

熊谷直實は平氏あり、平氏の彼、何を以て源氏に與せし乎、何を以て源氏の爲めに劍を提げ勇往直前、一騎當千の勇を奮ひし乎。一死以て君に報んと欲せし乎、將た功名を一世に輝がさんがため乎、抑も亦た厚祿を一身に負はんがため乎。而じて到る所の戰に名を擧げ武を顯はし、功名他人にゆづらざりし彼は、何故に槍劍を棄て、弓矢を抛ち、飄然として佛界に逃れし乎。賞祿の功に酬ひざりしため乎、或は身を安全に保たんため乎、是れを彼の死後一千年に垂んとする今日まで、人の知らんと欲して知る能はざる一大疑問あり。

彼は世人の想ふが如く、慄慄、卒意、剛膽の人にあらず、彼は當時の人のあり得べからざる程やさしさ、性質を有したりき。彼は意の人に非ずして情の人ありきなり、「ヘッド」の人に非ずして「ハート」の人ありきなり、冷かある人に非ずして温かある人ありしなり、彼は社會の光明よりも暗黒を多く見ぬ、暗黒を見ては彼は女々々き泣人となりぬ。嗚呼このやさき感情的の彼は何故に聞くも恐しき戰場に出で、勇往直前せしか、乞ふ吾人をして彼が歴史を繙かえめよ。

武勇を以て名を得たりし平治郎太夫直貞は彼が父ありき、直貞は平忠盛と不和ありき、豐明の節會の

夜、忠盛を闇打にせんと謀れる雲の上人にくゝして劍を握りしは直貞あり、事は遂げずして顯れたる、彼の家族は残りなく、武州埼玉郡熊谷の莊に配流せられぬ。時に二歳の嬰兒ありし弓矢丸の直實は、乳母と共に伯母簀久下權頭の救助を得て、その館に養育せられぬ。熊谷の莊に於て直貞は武勇を以て鳴れり、忠盛之をきゝ心竊に惧を懷き殺し以て後患を除かんと欲せたり、忠盛の意を受けたる刺客は武州に下り來れり、刺客の刃は彼が父及び二人の兄を死に導き、尙ほ飽きたらずして彼を求め、されど彼は慈母と乳母の深き注意の下に、久下權頭の館に隠れて辛く一命を保つを得たり、是ぞ彼が十二歳の時なりき、此一事變、可憐なるこの少年の胸に如何に強く響きし乎、如何に深く彫られし乎。

寒夜爐を圍む時、四隣人静まりて峰の松風がすうにひゞき、さらでだに寂しき夜半、あゝ人の昔を、忍び出で思ひは千々に碎けつゝ、露はらくと袂を沾す慈母を慰め兼ねつ、彼は血涙千行切齒扼腕せり。春花の麗しく咲き亂れ夏の燕の古巢に返るを見て、かへり來らざる亡き夫、亡き二兒を思ひ出で嘆き悲む慈母の涙は、彼が熱腸をしぼる種ありき、物憂き秋の空を渡る旅雁の聲、夕を送る遠寺の鐘、切々唧々たる虫の音は、如何に彼の心に響きしよ、げに四季をりくゝの物にふれ、事につれ嘆きに沈む慈母の涙滴は、彼の肝を屠る刃より苦かりき。嗚呼この嘆き、この悲み、この苦く、是れとりもなほさず平家が彼に送りし贈物なりき。彼は夜半鷄鳴をきゝて蹴起せり、彼は曉天雪霜を踏んで劍を鍊ひ、夜半月明に乗じ射を試み、日又一日、年又一年、孜々屹々、軀を鍛ひ武を鍊り、天を仰ぎ以て復讐の時機に至るを待ち設けぬ。

時は至れり、平治の亂は起れり、源氏の義朝兵を擧げて平家を伐さんどす、待ちにまちたる彼は十九

歳の一青年を以て、孤劍飄然、京師を指して走り、惡源太義平に属して電光疾雷の如く狂ひ戦ひぬ。然れども戦の神は源氏を見捨てしにや敗は彼等の頭上に落ち來りしかば、心は矢竹にはやれども如何ともあしがたく、心ならずも、都を落ち悄然と去て東國に歸りけり、今や頼みし義朝は敢なく三條河原の露とありて、再舉の望茲に絶へ、只だ万望を一縷に繋ぐは頼朝が虎口を追がれて伊豆に流されし一事のみ、されど十四歳の頼朝何の時にう兵を舉げん、血氣凜々たる彼は刀を懷にし、荊荷を學びて京よ入りぬ、然れども昇る旭日と爭ふ平氏の威勢焉んぞ彼が短劍に挫けん、幾十百人の平族焉んぞ彼の短劍に斃れん。果然彼は悟れり、時を待たざる可らざることを。乃ち再び悄然歸りて靜かに武州熊谷の莊に蟄伏し、機にふれ、事につけ、屢ば伊豆に微行去て頼朝を訪ひ、速に兵を舉ぐべきことを懇懇せり、されど時機は至らず、至るものは積る歲月のみにて、三十路も夢とすぎ、彼は四十歳とありぬ。

治承四年二月四日、以仁王の平家追討の令は、諸國に流布せられ、待ちたる時機は再び至りて、頼朝兵を舉げぬ。彼は之をきき、欣喜雀躍、十五歳ある子息小次郎を伴ひて、頼朝の旗下に屬し、東戦西陣、直に東國を定め、餘勇尙ほ凜乎としてあたりを拂ひ、鐵劍一揮、忽ち平族を殲さんものと、時や遅しと待ちたりしが、會々平氏は木曾義仲に都を逐れて、西海に走まうば、彼は恨重ある敵れ頭上に手練の刃を加ふる能はざるおとを恐れたり。時勢一變、忽ち頼朝は義仲を討つことゝあれり、彼は冠者九郎義經に従ひて東上し、宇治川に於て戦へり、宇治川の戦に於て彼は如何にあせしか、見よ、佐々木、梶原が騎馬にて川を渡りて先登せしを見て、如何にさわぎしよ、彼は自己の鎧馬をすてゝ、敵箭雨注する宇治橋、而も橋板を撤したる橋桁に向はんとせり、然れども可憐の小二郎が従はんことを恐れ、この急遽の際、彼は小二郎を召して懇々切々已につゝかず、総軍と共に渡るべく説諭せり、小二郎聞かず、

彼は餘儀なく伴ふて橋に向へり、然れども敵の矢益々はげしく降り、激流橋桁を動うして、足の固めを失はんとするとき、彼は一步を進むる毎に一たび顧み、たゞ小二郎の危きことのみ思ひ、敵を忘れ、已を忘れて、小二郎誤つちよ誤つちよと呼びたりき、子を思ふ親の心は今古東西皆同じ、然れども情の人ありし彼の脈搏如何にはげしうけむ。

一の谷の戦は、彼の迷執の闇を破り、眞如の月をして彼の胸奥に輝かめぬ。平氏、あゝこの平氏、これに彼が不倶戴天の仇ありき、彼が萬斛の涙を流きたりしはこの平氏のためありき、幾多の苦を嘗めたりしはこの平氏の爲ありき、之がために彼は武術を錬磨せり、之がために万死の途に出入せり、之がために慈母を棄て、愛妻を棄て、故郷を棄たりき。今やこの平氏と戦ふべき時は來れり、仇を報ふべき時は來れり、滿腔の憤懣を散すべき時は來れり、是に於て彼は奮へり、喜べり、決然天を仰ぎて躍起せり。

然れども彼は頼朝の爲に戦ふに非ずして、頼朝に依りて仇を報せんために戦へり、彼が戦は獨自一己のためありき。故に彼は總軍と共に等しく戦ふを願はず、萬騎に先ち、子息郎徒唯三騎、密に軍陣を出で、萬籟寂々たる夜半、汀々の簫の光に導うれ、波うつ磯邊を歩ませて、城戸口に攻寄たりしも、彼が戦はんとするは雜兵士卒は非ずして、平家一族の人々ありしあり、彼は城戸に於て大音揚げて城戸開きて來り戦べく絶叫せり、能登守來るべし、知盛來るべしと、彼は名ある人々を呼び求めたり、然れども一人の答ゆるものなく、一人の出來るものなく、たゞ城中より答ゆるものは雜兵の射下す雨箭の響のみありき。是よ於て彼は退きて、夜の明くを待ちたりき、目ざす仇敵の出來るを待ちたりき、敵の雨箭は止み、夜は再び寂寥となり、山路に風やみ、海上に水靜けく、波に鳴く千鳥も武士に畏れやしけ

い、一聲だにも聞ゆるものなし。折しも城内に響く伎樂の調べ、唳々、嚙々、斷へては、つゞき續きてはまた、へ、或は瑞鳳の雲霄に天の妙音を吟する如く、或は巴狹の霜月よ老猿の悲鳴するが如し、彼は覺へず勇心を蕩されぬ、彼は口號めり、上臈都人は情深く心もやさしきこと哉、かゝる乱の世の中に龍吟鳳鳴の曲を調べ、詩歌管絃の興を催す事の面白さよ、我等いかねば、邪見の夷と生れ、いつまで命を長らふやらん、身には甲冑をはあたず、手には弓矢を携へて箇様の人に向ひ、鬭争の劍を研くことの悲しさよと、是ぞ彼が萬物皆空の理を悟りし始めなりける。

暗は明とあり、夜は朝とあり、寂寥は鬭争と變じぬ、消へんとせし彼が豪氣は再び熾んに、奮然蹶起、敵陣に向ふて突進せり、諸手の兵は攻寄たり、戦始まり馬蹄轟きて塵空を蔽ひ、鯨波起りて山崩るゝ如く、射りつ射られつ、打ちつ打たれつ、矢叫の聲、打物の響、悽絶慘絶の數時間、平氏敗れて源氏勝ち、戦は將に終らんとす、獅子猛虎の勇を奮ひ戦ふて、一の獲物を得ざりし彼は狂人の如く狂ひ狂ふて大なる仇敵を求めぬ、忽ち落ち残りし敵將一騎眼前にあり、彼は留り戦ふて雌雄を決せざるを罵り叫びて奔馳せり、敵はうへせり、彼は難なく敵を組み伏せ腰刀を抜き、首をかきんとして内甲を見れば、あゝ無残、十五六ばかりの若上臈、薄假粧に鍔黧黒あり、一見彼が満腔の勇氣は挫折せり、彼は殺すことを忘れたり、彼は問ふて此若武者は經盛の子、今年十六歳ある無官太夫敦盛あることを知り。彼は全歳ある小二郎が前夜負ひし些の傷に心を痛め悲めり、今は小二郎と同年ある可憐の上臈を殺さんどす、一念是に至て豪氣頓に挫け、彼は涙を流して扶け起し以て逃れしめんとせり、然れども萬人の眼は彼をして思ふまゝに行はしめざりき、已むなく紅涙潜々、後日の訪菩提を約えて首を取りぬ。彼は經盛の心を汲みはかり義經に申し請ふて、敦盛が着け玄甲冑、弓矢、漢竹の笛、一も取落さ

す、一紙の消息狀に相具して、敦盛の首をば父經盛に送りけり、見よ、金殿玉樓に、詩歌管絃の興を催て、人世の憂きを知らざりし平家は、今や身を置くに處なく漠漠たる大海の波に漂ひ、彼が不俱戴天の仇敵は利慾の人のために亡されんとす。嗟呼朝に榮花を開くもの、暮に無常の風を傷み、昨は千金の家に誇る輩、今は有漏の露に化す、彼果して茲に見るありし乎、彼は忽ち無常を悟れり、忽ち浮世の羈絆を脱せり、所謂此世を達觀したる人とはあれり。

是に於て彼は直に暇を義經に乞へり、然れども許されざりき、強ひて歎願せり然れども強ひて許されざりき、彼は心あらずも再び劍を操つて軍に從へり、然れども八嶋に於て、壇の浦に於て、名將打たれ、勇卒死し、名孪は海底の藻屑となり、神劍沈み、神璽沈み、萬乘の天子も敢なく魚腹に葬らる給ひし悲絶慘絶の大活劇を目撃したる彼は益々無常を悟れり、萬物皆空の冷味を嘗めぬ。

平家は全く滅亡せり、源平の争は終りを告たり、彼は國に歸り熊谷の莊に高臥して靜かに世上を觀察せり、今や燃へにし情火は全く消へて彼の心は氷の如く冷ありき。有爲轉變の世の習ひ、昨日は賴朝のためよ西海の波濤を叱咤し、百萬の軍を指揮して平氏を追討せし勇將も、今は賴朝のために追撃せられて、吉野の奥に、北陸の道に、膽を寒ふし、肝を消す、嗚呼豈に彼のみあらんや、菽麥を辨せぬ罪あき兒女も、猜忌の惡魔に追はれ、恐ろしき爪牙にかゝらざるもの少れあり、ア、人生は何事ぞ、君賴ひよ足らず、骨肉賴むに足らず、正義賴むに足らず、奸佞却て富貴に驕り、忠直却て貧困を極む、昨日の主従は今日の敵、親戚讐となり、舊故互に反目し、紛々たり又擾々たり、嗚呼浮世は利慾の世界あり、血の世界あり、劍の世界あり、火宅あり穢土あり、こゝに生れこゝに生く、名譽何かせん、富貴何かせん、是れ當時彼の胸中に來往せし思念ありき。忽然鍵は彼の心扉を開けり、昔し彼を養育し、彼がため

に敵の刃を防禦せし伯母聳入下權頭は、今や梶原景時と結托して、理不盡にも彼が所領を奪はんとす、而して正は邪に敗られ、誠は僞に蔽はれ、竟に其領邑三分の一を沒收せられたり。

是に於て彼は笑て起てり、出家の素志を細うに記したる一片の書を頼朝に呈し、直に一枝の筇を手にし西に向ひ、行々石橋山に登りて戰勝ちたりとて喜びしものを笑ひ、敗をしとて悲みしものを笑ひ、富士川を渡りて鳥の羽音に驚走せしものを笑ひ、驚き走りし敵を笑ひしものを笑ひ、宇治橋に至りて古への兒戲を思ひて大笑し、笑ひ笑ふて琵琶湖に浮び、三十六峰に吟じ、吉水に至りて薙髮し、緇の衣を身に纏ひ、斗櫛行脚、山を越へ川を渡り、野に起き里に寝ね、行き行きて重ねて行き行けば、彌陀の光はいや尊ふとく、浮世の塵は去つて跡なく、清き心は澄み渡りけん、彼は心靜かに蓮の花の淨き香りのうちに照りわたる眞如の月影を望み觀て微笑を湛へぬ。

嗚呼彼は涙の人なりしあり、情の人なりしあり、彼が劍を握りて起ちまは之がためなりき。彼が佛界に脱れしも亦た之がためなりき。彼を生ぜしも情あり。彼を死せしも亦情あり。情は實に彼が生命なりき。

西 肥 紀 行

(承前)

隈 本 紫 陽

經ル所已ニ十里漸ク勞チ覺ヘリ至是將冠山麓礪石相布クノ途ニ出ルニ及ビ殊ニ疲憊ニ堪ヘズ一步一喘ノ狀アリ山氣莽々蒼煙杳々、間行ク一里黃昏繼カニ士隣ノ居ニ達スルヲ得タリ士隣豫メ予輩ノ至ルヲ知ルヤ攀族大ニ喜ブ沐浴晚餐方ニ終レバ田口子晋山川士端ト平戸ヨリ來ル士隣乃チ導テ別業玉泉堂ニ至リ宴ヲ張ル坐ニ一髻漢アリ熟視之チ久フシテ始メテ其神近電雷生ナルヲ知ル生膏テ五中醫